

渡辺 恭彦著

廣松渉の思想

内在のダイナミズム

「ポスト廣松世代」による
本格的な廣松論である。
著者にとって廣松氏は「古
典」として思想的な研究
対象となっている。本書の
帯には、「この『廣松渉と
いう』独自の哲学者の人と
思想と時代と影響関係の全
体を思想史上に位置づけ」
たとある。本書の一部は要
旨が昨秋の社会思想学会
で報告されている。折し
も、廣松氏の主著の一つ
『世界の共同主観的存在構
造』が昨年一月に岩波文
庫で発行された。同文庫に
収録されたということは、
読み継がれていく『古典』

の仲間入りをしたことを意
味する。そこへ来て本書の
登場である。著者ら若手の
活躍に期待するのは評者だ
けではあるまい。

本書は全十章から成る。
第一章 戦後
日本の学生運
動における廣
松渉、第二章
廣松渉の革
命主体論――
物象化論への
途、第三章 物象化論と役
割理論――廣松渉の思想形
成における『資本論』の哲
学、第四章 廣松哲学は
「存在と意味」における内
在的超越。

本格的・意欲的な廣松論

「ポスト廣松世代」の若手による

小林 昌人

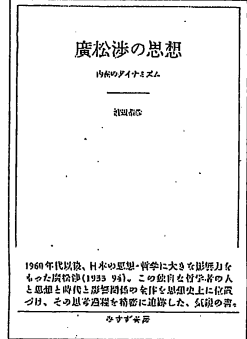
「廣松渉の歴史観、第九章
ノ連・東欧崩壊後におけ
るマルクス共産主義・社会
主義の再解釈、第十章
『存在と意味』における内
在的超越。

多岐にわたる廣松氏の著
作群の全体をカバーするも
のではないにせよ、それ
を一著をもってしては不可
能であり、複数の人々の協
働を必要とするだろう

「廣松渉の歴史観、第九章
ノ連・東欧崩壊後におけ
るマルクス共産主義・社会
主義の再解釈、第十章
『存在と意味』における内
在的超越。

「廣松渉の歴史観、第九章
ノ連・東欧崩壊後におけ
るマルクス共産主義・社会
主義の再解釈、第十章
『存在と意味』における内
在的超越。

「廣松渉の歴史観、第九章
ノ連・東欧崩壊後におけ
るマルクス共産主義・社会
主義の再解釈、第十章
『存在と意味』における内
在的超越。



A5判・400頁・5800円
みすず書房
978-4-622-08681-9
TEL. 03-3814-0131

「資料・戦後学生運動」が、疎外論批判が政治(革命論)に限定されて了解されていくフシがある。こ
う盛り返している。同章は
「社会的思想的な手法がいかん
なく発揮された箇所であ
る。ただ、評者としては本
書に不満も残る。著者は「人
間の能動性」「個人の主体
性」といったものに強くこ
だわっている。そのせいか、
廣松氏が決して使わなかつ
た「共同主観」
なる用語が
「主観と共同
主観」という
対概念として
無雑作に用い
られるといっ
た事例も見られる(一六三
頁)。さらに、著者は疎外
論にシンパシーを感じてい
るようであり、「疎外革命
論批判が「……」マルクス
の革命論を疎外論に見出す
解を廣松が乗り越えよう
としていたこと」を「勇み
足と呼んでいる(四二頁)。
本書が廣松氏のヘーゲル左
派論を扱っていないことと
無縁ではないと思われる

★わたなべ・やすひこ
奈良女子大学非常勤講師
★思想史 京都大学大
院博士後期課程修了。